The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	The Poetics of Retelling : A Study of The Faerie Queene
Author(s)	足達, 賀代子
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49406
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【6】

氏　　名	足　達　賀代子（あだち かよこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２２４２９　号
学位授与年月日	平成20年９月25日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	The Poetics of Retelling : A Study of *The Faerie Queene* （語り直しの詩学ー『妖精の女王』の研究ー）
論文審査委員	（主査） 教　授　玉井　暲 （副査） 教　授　森岡　裕一　　教　授　服部　典之　　准教授　片渕　悦久 准教授　石割　隆喜

論文内容の要旨

本論文は、１６世紀後期に活躍したイギリス・ルネサンス文学を代表する詩人エドマンド・スペンサー（１５５２－９９）を取り上げ、その代表作の詩『妖精の女王』（１５９０、９６、１６０９）において、詩人が、「女王の理想的イメージ」をめぐって関わってくる政治的・文化的圧力に抗して、いかに「語り直しの詩学」を駆使してみずからの詩的世界を構築したかを考察した研究である。論文は、序論、本論４章、結論、および注、参考文献から構成されており、全体で英文にて２５２ページ、和文４００字詰め原稿用紙に換算して約５５０枚からなる論文である。

まず、序論において、「栄光」を寓意すると同時にエリザベス女王を表わしている『妖精の女王』の主人公グロリアーナは、スペンサーの意図する「女王の理想的イメージ」を描出するものという通説を検討したあと、このイメージが、初期の詩『羊飼いの暦』（１５７９）の中の「四月の歌」に描かれる Eliza 像と密接な関係にあることを明らかにする。

第１章では、女王を「四月の歌」では理想的な女性君主として表出していたが、『妖精の女王』では、「（女）王の二つの身体」理論にもとづいて、政治的身体の表象として「世界の帝王である妖精女王 Gloriana」を描き、自然的身体の表象として「最も美しく徳高い貴婦人 Belphoebe」を描くという、女王の「公」と［私］の人格をそれぞれ讃える叙述が見られることを明らかにする。論者は、この「賛美の二分構造」にもとづく「女王の理想的イメージ」の描出は、古典的叙事詩の英雄達の描写とパラレルな関係にあることを指摘し、詩人は女王に対して伝統的詩学が守ってきた賛美詩の理念に則って「賛美」表象を実

行していると主張する。特に Belphoebe が相愛の結実を表わす人物として描かれる点に注目し、ここには、Gloriana と Arthur の愛を成就させ、身体を二つに分けて表象されている女王を一つの存在へと統合する「約束の時」をめざす物語の志向性が窺われると言う。

第２章は、詩人スペンサーのパトロンであったウォルター・ローリーが『妖精の女王』の詩的表現にいかに複雑な影響を与えたかを、ローリーみずからがこのエリザベス女王賛美の長詩に寄せた推賞詩の分析を通して明らかにする。ローリーが妖精女王をペトラルカ風恋愛詩の貴婦人として描くという一つのイメージに限定したため、スペンサーの女王表象において「賛美の二分構造」が揺らぎ始めたことを指摘し、また、相愛とは対極をなす「報いなしの愛と奉仕」というペトラルカ風恋愛の「真の愛」の規範を強制する圧力を詩人は強く感じていたのだと、論者は主張する。

第３章は、ペトラルカ風「真の愛」がエリザベス朝の騎士達のとるべき行動規範として強制され、いわば支配原理としての「ポリティカル・ペトラルキズム」が確立されていたことに触れたあと、この原理の圧力との関わりにより、『妖精の女王』（第３巻末）において当初描かれていた両性具有像（Hermaphrodite）が削除されたことを、詩的テクストの綿密な分析を通して明らかにする。

論者によれば、詩人はここから「語り直し」による詩的テクストの修復に着手したと言う。スペンサーは、両性具有像に象徴されていた「相愛」を美徳と栄誉へ駆り立てる自然で高貴な感情であると弁護したうえで、第４巻序歌において、エリザベス女王がみずからと臣下との互恵関係を相愛の言説を用いて繰り返した発言を想起させる詩句を詩中に取り入れ女王賛辞を行なっていることを、具体的な詩行の分析を踏まえて論述する。

第４章は、詩人が「語り直し」という修復の営みを試みているありようを、テクストの綿密な読みと分析を通して明らかにする。妖精女王を相愛の守護女神として描き、Amoret と Scudamore の二人の仲を愛の成就を授ける物語に語り直し、ポリティカル・ペトラルキズムの貴婦人である Mirabella には改悛と贖罪のために流浪させ、Timias を解放して Arthur との騎士道修行の旅に出させてやる、といった叙述に論者は注目する。

Gloriana の復位は、第５巻と第６巻を通して、太陽女王としての本来の妖精女王を表わす叙述を獲得することにより成し遂げられ、彼女が公私両人格をあわせもつ存在として表象されることとなり、ここに詩人の女王賛歌が完成し、また、これとともに、女王賛歌があらたに語り始められることになるのだとも、論者は述べている。

最後に、スペンサーの「語り直しの詩学」の中に、伝統を受け継ぎつつも時代の声を先導しようとする詩人としての使命観が読み取れると述べて、論を終えている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、イギリス・エリザベス朝のルネサンス文学を代表する詩人エドマンド・スペンサーを取り上げ、その代表作で全７巻からなる長大な詩『妖精の女王』をテクストの綿密な読みと作品を取り巻くコンテクストへの深い学識とにもとづいて考察した意欲的な研究である。従来よりこの詩について指摘されていた構造上の不統一性、錯綜性、曖昧性といった特質を、「女王の理想的イメージ」をめぐる詩人自身の詩的ヴィジョンと、エリザベス女王をめぐって展開した賛美の言説、および女王を中心とする政治的・文化的状況との葛藤・摩擦に起因するものとして読み解こうとする大きなパースペクティヴからの考察は、極めてスリリングで、その野心的な試みは高く評価されねばならない。第１巻から第７巻に至る長大な詩的テクストを、政治的・外的圧力に対する「語り直し」による抵抗の物語として、あるいは、削除・修復・加筆という詩作的営みによるみずからの詩的ヴィジョンの達成物語として読むという試みは、この詩作品のもつ今日的新しさを掘り起こすことに成功している。特に、両性具有像のテクストからの消失という問題をめぐる考察は極めて興味深く、本論文の中核的な議論をみごとに集約する卓越した論である。また、詩人とウォルター・ローリーとの文学的・政治的交流を踏まえて、グロリアーナ像の変貌を分析する考察は当時の文壇を彷彿とさせるものがあって、ひとつの好論を形成している。

ただし、本論文において問題がないわけではない。各章において章単位で提出されるべき結論が確定的でなく繰り延べになる傾向が見られるため、論全体の展開や論旨を把握するのが困難になることがあり、論の構成にさらなる工夫が求められよう。また、この詩的テクストと政治的コンテクストとの相互関係への考察については、より一層の深い掘り下げが必要と思われる部分が散見される。

しかし、これらの点は望蜀のごときものであって、本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。